

安政5年(1858)、相模国三浦郡公郷村永嶋氏の旅

- 「伊勢参宮道中記」の検討 -

藤井 明広*

The journey of Nagashima in Kugou village in 1858: focusing on the study of the travel diary “Isesangu-doutyūki”

Akihiro FUJII

NAGASHIMA family in Kugou Village, Miura District, Sagami Province (currently known as Yokosuka City) had influence in the Miura Peninsula. This paper examines “Isesangu-doutyūki”, the travel diary, inherited in NAGASHIMA family. As a result of this study, however it was simple, the part of the movement in other than Miura Peninsula of person who was assumed to be the head of NAGASHIMA family were disclosed. For example, the connection with Shōnan Nakabayashi (the artist from the area of currently known as Yokosuka City), the conference with the feudal retainer of Kawagoe, and the interaction with SHIMAZAKI family in Tsumago-juku, etc.

はじめに

本稿では、相模国三浦郡公郷村(現横須賀市)の永嶋家に伝来した「伊勢参宮道中記」(以下、道中記)について検討する¹。永嶋家は海防諸藩のもとで郡中取締役等の地域運営に関わる役職を務めるとともに、幕府による台場建設にも関わる等、三浦半島の名士である²。本道中記は後述の通り、永嶋家当主である庄兵衛(庄太郎)あるいはその子庄輔による旅の記録と推定される³。本道中記を通じて、永嶋家の人物が、三浦半島を出て、どのような場所を見聞し、どのような人物と接触していたのかを検討することは、地域史の一端を明らかにする上で意義あるものと考えられる。なお、本稿では家としての永嶋家を指す場合には「永嶋家」、本道中記に記された旅の当事者と推定される永嶋庄兵衛あるいは庄輔を指す場合には「永嶋氏」と便宜的に表記する。

* 横須賀市自然・人文博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka, 238-0016 Japan.

原稿受付 2023年1月20日 横須賀市博物館業績第780号

Keywords : edo period Journey

キーワード : 江戸時代 旅

第1節 永嶋家と道中記

本節では、永嶋家と本稿の検討対象である道中記について概観する。

(1) 相模国三浦郡公郷村永嶋家

永嶋家は鎌倉幕府の有力御家人であった三浦氏の一族を称し、戦国時代には後北条氏のもとで「浦奉行」や「浜代官」を務めたという由緒を持つ旧家である⁴。19世紀には公郷村名主を務めるとともに、三浦半島に配置された会津藩・川越藩・熊本藩・佐倉藩等の海防諸藩のもとで郡中取締役等の地域運営を担う役職を歴任する。

本道中記に記された旅の当事者と推定される永嶋庄兵衛は、文政2年(1819)、公郷村が川越藩領であった際には名主見習役に任命されるとともに、苗字帯刀御免、郡中取締役であった父庄司代勤、五人扶持支給、「土席」に準じる立場を仰せ付けられている。嘉永7年(1854)には川越藩に代わって公郷村の支配領主となった熊本藩から川越藩時分と同様の役職・待遇を仰せ付けられている⁵。安政2年(1855)には父庄司の老年につき家督を相続し、郡中取締役等の役職を引き継いでいる。よって、安政5年(1858)当時、永嶋庄兵衛は熊本藩預所の地域運営を担う立場にあつたと思われる。また、同じく当事者と推定される永嶋庄輔は、弘化3年(1846)、川越藩領であった際に名主見習および郡中取締役であった祖父庄司の代勤と苗字帯刀御免を仰せ付けられている。嘉永7年(1854)には、熊本藩預所となった公郷村の名主役のほか苗字帯刀御免、祖父庄司・父庄兵衛の代勤、二人扶持の支給、毎年白銀7枚下賜、「郡筒世話役」、「村々勸農倡役」を仰せ付けられている。

前述の通り、本道中記の当事者については、現時点では史料的制約により確定できていない。しかしながら、①本道中記に記された永嶋氏の伊勢参宮にあたって餞別を控えた帳面には、【表1】の通り、居村である公郷村を越えて、「三浦郡中村々」、さらには三浦半島外の村々に至る広範囲の者たちから合計約19両もの餞別が寄せられていること⁶、②移動には駕籠を多用し、時に宿泊にあたって脇本陣を利用する等、比較的余裕のある旅であること、③道中では同じく三浦一族を先祖とすることから交流をしていた妻籠宿嶋崎家に逗留して墓参りに赴いていること等から、本道中記の当事者は、海防諸藩のもとで地域運営を担った当時の永嶋家当主庄兵衛あるいはその子であり公郷村名主役等を務めていた庄輔、すなわち「永嶋氏」であつたと推定される。よって、本稿では本道中記の内容が「永嶋氏」(庄兵衛ないし庄輔)による旅であつたという前提のもとに検討を進めることとする。

(2) 旅日記「伊勢参宮道中記」

本稿で検討を行う「伊勢参宮道中記」は、縦12.5cm×横17.5cmの横半帳、丁数は67丁である。安政5年(1858)正月25日に相模国三浦郡公郷村を出立し、東海道を經由して伊勢参宮を目指し、その後奈良・大坂・讃岐国金毘羅宮・京都等に赴き、さらに中山道を經由して善光寺・草津・日光を廻りながら国元への帰路の道程が記されている。但し、後欠のために4月16日の帰路日光に立ち寄って以降の動向は不明である。よつ

て、本稿では、安政5年(1858)正月25日(公郷村出立)から同年4月16日(帰路の途中[日光])に至るまでの永嶋氏の旅について扱う。

第2節 旅の内容

本節では、安政5年(1858)の旅の行程と道中での動向について項目ごとに検討する。

(1) 旅の行程と目的地

本項では、記述のある安政5年(1858)正月から4月にかけての旅の行程について検討する。まず、永嶋氏の主な旅の行程を確認したい。【表2】は対象地に向かってあえて遠回りをして移動していると思われる場所や複数日滞在している場所を主な目的地として、便宜的にその間の経路をまとめたものである。【表3】は道中記の日ごとの動向をまとめたものである。旅の主要な目的地は、道中記冒頭に「伊勢参 宮道中記」とあるように、表向きの理由は伊勢神宮への参拝であったことが窺える。しかし、前述の通り、伊勢神宮のみを目的地としていたのではなく、例えば遠州秋葉山や奈良、大坂、讃岐国金毘羅宮、瑜伽山、京都、石山寺、草津、日光などあえて遠回りをして参詣や見物に赴く、あるいは数日間滞在をするなどしている⁷。勿論、道中では様々な寺社仏閣や史跡を見物し、時には案内を頼んで見物をしている。

(2) 旅の同行者

旅の出発(正月25日)から掛川付近(2月3日)までは、別行動を含みながらも相模国三浦郡浦郷村出身の絵師・中林湘雲(1818-1890)と行動を共にしていたとみられる⁸。とりわけ、ともに東海道原宿を訪れた際には「湘雲師懇意由ニ而、右宿内ニ植松次郎右衛門と申もの有り、同人方江立寄り」(正月28日)と、永嶋氏に原宿の名士である植松家を引き合わせている。

なお、植松次郎右衛門とは、家園「帯笑園⁹」で知られる植松与右衛門家の分家であり、本家植松家とともに原宿の資産家であった。中林湘雲は植松次郎右衛門家で絵を教えたとされるとともに、本家植松家の当主であった植松与右衛門季英の肖像画「植松孚丘像」を描くなど中林湘雲と原宿植松家との親密な関係性が指摘されている¹⁰。

(3) 旅先での交流

①川越藩士星隼太

2月28日には、大坂中之島で、公郷村の旧領主でもある川越藩の藩士星隼太と面談しているが詳細は不明である¹¹。

②妻籠宿嶋崎家

永嶋家と木曾の嶋崎一族は共に三浦一族を祖先と称している。安政3年(1856)頃には、両者が共通の先祖を持つ一族であると認識し、交流を持っていたことが明らかにされている¹²。本道中記においても、3月26日に中津川宿葛屋を出立した永嶋氏が、妻籠

宿本陣嶋崎家まで馬で移動し、同日は嶋崎家に宿泊している。記事は次の通りである。

【史料】

廿六日

朝晴天九ツ時蔦野屋出立、三拾町程、蔦野屋信次郎、同彦助右兩人ニ而送ニ成る、夫方馬籠宿ニ而雨降り出、同宿方妻籠宿馬ニ打乗嶋崎江着、同家泊リ、其夜大雨

廿七日

終日大雨、嶋崎ニ而知走（※馳走）ニ相成、同家泊リ

廿八日

晴天、嶋崎先祖之墓所江参、其夜同家江紀州家老御泊ニ付、親類大野屋孫右衛門泊リ

廿九日

曇天、大野屋ニ而朝飯いたし、亦々嶋崎江帰り、夫方種々知走（※馳走）相成、同夜嶋崎泊リ

朔日

妻籠宿嶋崎方朝四ツ時頃出立、與次右衛門、吉左衛門、孫右衛門、右三人ニ而同宿方三拾町程先之神戸立場迄酒肴并弁当持参ニ而被送、同所ニ而暫く酒宴之暇乞いたし、夫方雨ニ成ル、其夜野尻三文字屋伝右衛門泊リ

妻籠宿嶋崎家は、小説『夜明け前』の作者である島崎藤村の母の実家である。なお、安政5年（1858）の旅においては、島崎藤村の生家であり、妻籠宿嶋崎家の親戚でもある馬籠宿嶋崎家に立ち寄るなどの記述はない¹³。

おわりに

簡潔且つ羅列的ではあるが、安政5年（1858）における永嶋氏の旅について検討を行ってきた。三浦半島の名士として、地域運営や幕府の台場建設等に積極的な役割を果たしてきた永嶋氏であるが、本道中記からは現横須賀市域出身の絵師・中林湘雲とのつながりや大坂での川越藩士との面談、妻籠宿嶋崎家との交流等、三浦半島内に収斂されない永嶋家の動向の一端が窺えた。しかしながら、史料的制約から詳細が不明な点も多く、さらなる検討が求められよう。また、こうした永嶋氏による旅が地域運営等にどのように活かされたのかについても検討を要するが、いずれも今後の課題としたい。

¹「伊勢参宮道中記」（当館所蔵）。特に出典を記さない史料の引用や道中記の内容は、本史料に拠る。

²永嶋家に関する論考としては、安池尋幸「幕末期三浦半島における小運河開削一件についての覚書」（『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第38号、1993年）、松田隆行「海防体制下における村方の動向」（『地方史研究』第257号、1995年）、井上攻「幕末期における「国」の主張と由緒秩序」（『歴史学研究』No.847、2008年）神谷大介「幕末の台場建設と石材請負人」（小田原近世史研究会編『近世南関東地域史論』岩田書院、2012年）、同「幕末期の台場建設と石材調達」（『房州石の歴史を探る』第6号、2015年）、同「幕末期熊本藩にみる相州警衛の展開と村々取締役頭取永嶋家」（今村直樹・小閑悠一郎編『熊本藩からみた日本近世』吉川弘文館、2021年）など。

³永嶋家では代々「庄兵衛」を名乗るため煩雑である。よって時期に限らず、便宜的に本道中記の当事者と思われる永嶋庄兵衛（弘化3年（1846）、庄太郎より改名）を「永嶋庄兵衛」とし、「永嶋庄兵衛」の父を「永嶋庄司」（弘化3年（1846）、庄兵衛より改名）と記載する。

⁴「永嶋家代々御支配方御取扱向書抜」（当館所蔵）あるいは「旧家庄兵衛」（蘆田伊人編『新編相模国風土記稿』（雄山閣、1980年）、p301-303）や拙稿「三浦一族をめぐる由緒と物語-相模国三浦郡公郷村永嶋家の事例を中心に-」（横須賀美術館・神奈川県立金沢文庫編『運慶』（吉川弘文館、2022年））参照。また、19世紀における永嶋家の役職については「表 12-5 公郷村永嶋家の役職」（『新横須賀市史』横須賀市、2011年）、p540 参照。

⁵嘉永6年（1853）11月から文久3年（1863）に至るまで、公郷村は熊本藩預所。

⁶「参宮二付餞別到来控」（安政5年（1858）正月吉日付）（当館所蔵）。表紙には「永嶋」とある。村役人層から小前層、寺院などから餞別がおくられている。また、【表1】の餞別とは別に、公郷村内を始め、深田村や中里村、金谷村、大津村、芦名村の百姓等から「祝儀」として金銭を得ている。

⁷関東地方の庶民による伊勢参宮の旅において、伊勢神宮のみならず四国・西国まで足を延ばすルートは当時広く一般化していた、小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷-関東地方からの場合-」（『筑波大学人文地理学研究』第14号、1990年）。

⁸相模国三浦郡浦郷村の日向山光龍寺第11世の長男として生まれる。本姓は三浦氏。幼年期には江戸の谷文晁（1763-1841）、その後20歳前後までに京都の中林竹洞（1776-1853）、そして後年は九州豊後の平野五岳（1809-1893）に師事。のちに号を沖岳と改める。詳細は、河野通明「中林湘雲筆「四季耕作図屏風」の基礎的検討」（『歴史と民俗』第17号、2001年）、松木千尋「幕末横須賀の文人画家中林湘雲」（『神奈川大学日本常民文化研究所』第38巻2号、2005年）参照。前掲、「伊勢参宮道中記」（当館所蔵）には、「京都東山真如堂前 中林湘雲 かき屋と申茶屋の隣也」と、中林湘雲の居所と思われる場所が書き付けられている。

⁹小野佐和子「駿河原宿帯笑園の訪問者についてⅠ」（『千葉大園学報』第51号、1997年）によると、「帯笑園は、盆栽と園芸植物の収集で知られ、庭内の亭から望む富士の眺望と収集された多種類多品種の植物の観賞および園内に設けられた亭での歓談、あるいは書や文芸を楽しむ場であり、遠近の訪問者の交流の場となっていた」、また「参勤交代の大名から伊勢参宮の庶民まで、旅の目的を異にするさまざまな階層や職業の人々が訪れた」とされている。原宿植松家（本家）および「帯笑園」についての詳細は、同「駿河原宿植松家の帯笑園」（『ランドスケープ研究』59巻5号、1995年）、「京風画壇と植松家」および「植松家と帯笑園」（『沼津市史』（沼津市、2006年））等を参照のこと。

¹⁰前掲、小野佐和子「駿河原宿帯笑園の訪問者についてⅠ」（『千葉大園学報』第51号、1997年）。また、戦前の郷土誌の復刻である『沼津市歴史民俗資料館史料集 33 原町郷土誌』（沼津市歴史民俗資料館、2020年）、p110によると、「植松對雲 弘化三年三月二十七日原町五十六番地に生る。植松次郎右衛門の長男なり。通称を次郎太郎といひ、對雲と号す。（中略）安政五年十三歳にして京都稻荷山可亭の門に入りて専ら畫を學び、又沖岳に就きて學ぶ。齡三十五にして家督を相續し七代の主となる。（後略）」とあり、植松次郎右衛門の家の当主が中林湘雲（「沖岳」）に師事していたことが窺える。

¹¹前掲、「伊勢参宮道中記」（当館所蔵）には、星隼太の在所として「大坂上中之嶋淀屋橋北詰少し東江入ル 川越用場 星隼太」とあり。

¹²安池尋幸「木曾からの手紙」（佐藤孝之編『古文書の語る地方史』（吉川弘文館、2010年））。

¹³文久3年（1863）頃にも、草津温泉への湯治のついでに木曾嶋崎家（馬籠宿本陣嶋崎家に立ち寄り、妻籠宿本陣嶋崎與次右衛門家宿泊）を訪れたことが明らかにされている。前掲、安池尋幸「木曾からの手紙」（佐藤孝之編『古文書の語る地方史』（吉川弘文館、2010年））。

【表1】安政5年（1858）、永嶋氏による伊勢参宮への餞別一覧

| No. | 村名 | 名前（餞別差出者） | 金額 | 備考 |
|-----|---------|--------------------------|-------|-----------------|
| 1 | 走水村 | 飯島宗左衛門 | 金100疋 | |
| 2 | 浦郷村 | 高橋幸八 | 金100疋 | 名主 |
| 3 | (小菅ヶ谷村) | 梅沢與次右衛門 | 金100疋 | 名主,村々取締 役頭取等 |
| 4 | (鴨居村) | 青木弥四郎 | 金100疋 | 名主 |
| 5 | 八幡村 | 長嶋清蔵 | 金100疋 | |
| 6 | (金谷村) | 福本綾右衛門 | 金100疋 | 扇子2本付,名主 |
| 7 | (公郷村) | 聖徳寺 | 金100疋 | |
| 8 | (公郷村) | 村水主中 | 酒1樽 | |
| 9 | - | 松坂屋 | 金1分 | |
| 10 | - | 野村屋 | 金1分 | |
| 11 | 不入斗村 | 西来寺 | 金100疋 | |
| 12 | 横須賀村 | 大忠 | 金100疋 | |
| 13 | 横須賀村白浜 | 桶屋 | 金100疋 | |
| 14 | 横須賀村 | 浅羽長左衛門 | 金50疋 | |
| 15 | 横須賀村 | 浅羽長五郎 | 金50疋 | |
| 16 | 横須賀村 | 永嶋卯兵衛 | 金200疋 | 名主 |
| 17 | 横須賀村 | 世良俊口（的ヵ） | 金100疋 | |
| 18 | 江戸 | □（西ヵ）宮彦兵衛 | 金200疋 | |
| 19 | 公郷村 | 中見世 | 金100疋 | |
| 20 | 八幡村 | 長嶋六兵衛 | 金50疋 | 名主 |
| 21 | 平作村 | 忠八 | 金1分 | |
| 22 | 矢の津 | 太郎兵衛 | 金2朱 | |
| 23 | - | 石井三郎右衛門・石渡吉右衛門 | 金2分 | |
| 24 | 日向 | 清助 | 金1朱 | |
| 25 | 佐野村 | 永嶋友右衛門 | 金200疋 | 扇子紙添,名主 |
| 26 | 佐野村 | 永嶋萬兵衛 | 金100疋 | |
| 27 | 林村 | 重三郎 | 金1朱 | |
| 28 | 林村 | 庄左衛門 | 金2朱 | |
| 29 | - | 長左衛門 | 金1朱 | |
| 30 | - | 曾右衛門 | 金1朱 | |
| 31 | - | 太雄 | 上酒2升 | |
| 32 | - | 勝五郎・源左衛門・七左衛門・忠五郎・半七 | 金2分2朱 | 水主 |
| 33 | - | 今井仁平□ | 金1分 | |
| 34 | 沼間村 | 秋元与五右衛門 | 金1分 | |
| 35 | 浦賀 | 斎藤伝六 | 金1分 | |
| 36 | 深田 | 太平 | 金2朱 | |
| 37 | - | 永嶋義右衛門 | 金50疋 | |
| 38 | - | 石渡孫右衛門 | 金50疋 | |
| 39 | - | 与惣兵衛 | 金2朱 | |
| 40 | (公郷村ヵ) | 清兵衛 | 300文 | 「裏」 |
| 41 | 公郷村 | 四郎右衛門 | 金2朱 | |
| 42 | - | 金沢権次郎、岩堀喜三郎、岩堀幸右衛門、永嶋久兵衛 | 金2分 | |
| 43 | 堀之内村 | 文吉 | 金1朱 | |
| 44 | 堀之内村 | 水主中 | 金1分2朱 | |
| 45 | 中村 | 水主中 | 金2分 | |
| 46 | - | 千葉周伯 | 200文 | |
| 47 | □□□ | 熊次郎 | 金1朱 | |

| | | | | |
|----|--------|---|-------|---------|
| 48 | □□□ | 佐七 | 金1朱 | |
| 49 | - | 六三郎 | 200文 | |
| 50 | 山サキ | 新吉 | 金1朱 | |
| 51 | - | 長八 | 金1朱 | |
| 52 | - | 拾四郎 | 金1朱 | |
| 53 | 吉井 | 白井三之助 | 金2朱 | |
| 54 | (不入斗村) | 藏宝院 | 金1分 | |
| 55 | (大津村) | 小川三郎左衛門 | 金1分 | 名主 |
| 56 | - | 白井五兵衛 | 金2朱 | |
| 57 | (大津村カ) | 藤勘右衛門 (藤原勘右衛門カ) | 金1分 | |
| 58 | - | 惣五郎 | 金2朱 | |
| 59 | (大津村カ) | 斎藤市右衛門 | 金2朱 | |
| 60 | 佐野村 | 妙栄寺 | 金1朱 | |
| 61 | - | 池田屋 | 金2朱 | |
| 62 | 金谷 | 安治郎 | 金2朱 | |
| 63 | - | 松山 | 金1朱 | |
| 64 | 大津 | 源四郎 | 金1分 | |
| 65 | 堀内村 | 玄安 | 金2朱 | |
| 66 | 横須賀村 | 石戸重左衛門 | 金100疋 | |
| 67 | 横須賀村 | 竹永長三郎 | 金50疋 | |
| 68 | 中里村 | 善左衛門 | 金100疋 | |
| 69 | □□□ | 伝次郎 | 金50疋 | |
| 70 | 神金 | 惣左衛門 | 金1朱 | |
| 71 | 瀧ヶ崎 | 吉蔵 | 金1朱 | |
| 72 | 森崎村 | 平川三郎兵衛 | 金50疋 | |
| 73 | - | 小松原茂右衛門 | 金1朱 | |
| 74 | (公郷村カ) | 石渡左左衛門 | 金3朱 | |
| 75 | 横須賀村 | 三富長兵衛 | 金1分 | |
| 76 | 堀之内村 | 七左衛門 | 金1朱 | |
| 77 | 三ヶ浦 | 小峯長右衛門 | 金1分 | |
| 78 | 三ヶ浦 | 鈴木七左衛門 | 金2分 | |
| 79 | 横須賀村 | 宮本 | 金1分 | |
| 80 | - | 石渡八郎右衛門・雑賀源兵衛・雑賀太郎兵衛・雑賀市次郎・ 角井栄次郎・斎藤清三郎・升屋伊右衛門 | 金100疋 | |
| 81 | - | 佐太郎 | 金1朱 | |
| 82 | (大船村) | 甘粕小左衛門 | 金1分 | 紙・扇子,名主 |
| 83 | 楠ヶ浦 | 栄八 | 金1分 | |
| 84 | - | 斎藤新七 | 金2朱 | |
| 85 | 泊 | 弥惣兵衛 | 金1朱 | |
| 86 | 楠ヶ浦 | 与兵衛 | 金1分 | |
| 87 | 泊 | 久右衛門 | 金1朱 | |
| 88 | - | 三浦郡中村々 | 金2兩2分 | |
| 89 | 公郷村 | 太郎 | 200文 | |
| 90 | - | 忠七隠居 | 金1朱 | |
| 91 | ヨ□ | 江戸屋 | 金2朱 | |
| 92 | 楠ヶ浦 | 半十郎 | 金1朱 | |
| 93 | ヨ□ | 彦右衛門 | 金2朱 | |
| 94 | (公郷村) | 喜右衛門 | 金2朱 | |
| 95 | □□□ | 平次郎 | 金1朱 | |

出典：「参宮二付銭別到来控」（当館所蔵）。

【表2】旅の主な行程

| ルート | 行程 |
|------------|---|
| 公郷村～伊勢神宮 | 公郷村→葉山大文字屋→腰越→藤沢宿→大磯宿→箱根宿→三嶋宿→三嶋明神（「社悉ク及大破仮御堂なり」）→原宿（原宿植松次郎右衛門方）→吉原宿→由井宿→興津宿→江尻宿→久能山→龍華寺（「龍花寺」）→府中宿→浅間宮→藤枝宿→島田宿→日坂宿→森町→秋葉山（秋葉神社）→石打村→熊村→須山→大野村→鳳来寺→新城→豊川稻荷→御油宿→岡崎宿→池鯉鮒宿→池鯉鮒明神→熱田明神→名古屋→津嶋午頭天王→桑名→神戸宿→白子観音→上野宿→津宿→松坂→山田外宮御師幸田氏方（二見浦、外宮、内宮など見物） |
| 伊勢神宮～大坂 | →新茶屋（紀州藩領）→月本→平松宿→伊賀上野→笠置→笠置山→奈良（猿沢池、春日宮、二月堂等、法華寺、西大寺参詣、唐招提寺参詣、菅原天神社参詣、西ノ京薬師寺、法隆寺、龍田明神、染井寺、當麻寺など参詣）→高田村→八木村→三輪→三輪明神→長谷寺観音→桜井宿→飛鳥井村→岡寺→多武の峰→四軒茶屋（「高取之城見ゆる也」）→瀧の畑村→上市村→吉野山（蔵王大権現、吉水院など参詣）→六田村→土田村→高室院→「大津」→粉川寺→岩出村→和歌山→山口村→貝塚宿→高石村→住吉院→「鏡天神」→妙国寺→「住吉の社」→天下茶屋→天王寺→日本橋→大坂市中（「御城、伝馬入天神」、「東西御坊」、淀屋橋、四ツ橋、高麗橋筋、「長者町」、難波新町、木津川辺ほか見物）→中之島「川越様御用場星太殿宅江参り面談いたす」 |
| 大坂～金毘羅宮 | →川口→兵庫湊→「瀬戸」→丸亀川口→多度津→屏風ヶ浦海岸寺→弥谷寺→善通寺→金毘羅宮 |
| 金毘羅宮～京都 | →丸亀→備前田ノ口浦→瑜伽山→田ノ口浦→「ひびの」→赤穂浜→書写山→姫路（「御城御太守橋成高キ御太守也」）→一豆崎村→曾祢天神→「石の宝殿」（生石明神）→「高砂の社」→「住吉明神」→「行浜の宮」→明石→「人摩呂の御社」→舞子の浜→須磨寺→兵庫→生田明神→西ノ宮→「えひすの社」→厄ヶ崎→大坂→森口宿→橋本宿→石清水八幡宮→「新田」（「宇治ノ手前」）→宇治→平等院→三室戸寺→黄檗山→伏見→「稻荷の社」→東福寺→「三拾三軒堂大仏」→京見物（六角堂、錦天神、祇園社、知恩院、御所、吉田殿、真如堂、黒谷、南禅寺、金地院、東大谷、清水寺、大仏、三十三軒堂、東福寺、西本願寺、北野天満宮、金閣寺、今宮神社、大徳寺、二条城など） |
| 京都～妻籠宿嶋崎家 | →三条橋→三井寺→「小耐入船場」→「唐崎の一ツ松」見物→石山寺下→矢橋→草津宿→武佐宿→高宮宿→鳥居本宿→番場宿→醒ヶ井宿→柏原宿→今須宿→関ヶ原宿→垂井宿→赤坂宿→美江寺宿→河渡宿→加納宿→「新金村」→鶴沼宿→太田宿→伏見宿→御嶽宿→細久手宿→大井宿→中津川宿→馬籠宿→妻籠宿（「嶋崎先祖之墓所江参り」） |
| 妻籠宿嶋崎家～善光寺 | →「神戸立場」→野尻宿→須原宿→小野瀧→寝覚の床（「寝覚」）→「浦嶋太郎之古跡」→上ヶ松宿→「木曾掛はし」→福島宿（「福原宿」）→宮ノ越宿→鳥居峠（「鳥井峠」）→奈良井宿→贅川宿→本山宿→洗馬宿→江原宿→松本（「松平丹後守殿御城下」）→岡田宿→菊谷原宿（「かり原宿」）→刈谷原峠（「かり原峠」）→会原宿→立峠→乱橋村→青柳宿→麻績宿（「おミ宿」）→猿ヶ番場峠→篠ノ井宿→善光寺（「御開帳江参り」）→ |
| 善光寺～草津 | →屋代（「矢代」）→戸倉→坂城（「坂木」）→上田宿（「松平伊賀守殿城下也」）→真田→大日向→大笹（「大笹入口二関所有り」）→中井村→草津（入湯の他、「金毘羅之瀧」、「さいのかはら」（賽の河原）、「不動之瀧」などを見物）→ |
| 草津～日光 | →小雨村→生須村→澤渡（「温泉場也」）→中之条→小野子→北牧→白井→八崎→米野→小暮→大胡→室沢→深沢→花輪→萩原村→神戸→澤入→中禅寺→華厳の瀧→「清瀧」→日光（→後欠につき不詳） |

出典：「伊勢参宮道中記」（当館所蔵）

【表3】永嶋氏による旅の行程

| 月 | 日 | 天気 | 事項 |
|----|----|--|---|
| 正 | 25 | - | 国元を出立し、同日九ツ時頃に葉山大文字屋へ到着。ここにて、見送りの人びとへ暇乞をし、乗船して八ツ半時頃に腰越に上陸。その夜は、藤沢宿の又兵衛方にて宿泊。 |
| | 26 | - | 早天に藤沢宿を出立。大磯宿角屋半右衛門方にて中喰し、同所にて同行者である中林湘雲（「中林」）とともに宿駕籠を雇う。夜小田原宿三河屋平兵衛方に宿泊。 |
| | 27 | - | 小田原宿を出立し、箱根山越えをするが、同所では雪が降り出す。関所手形を差し出して関所を通り、箱根宿本陣天野平左衛門方にて中喰をする。そのまま駕籠に乗って三嶋宿銭屋伊三郎方へ至り、宿泊。三嶋明神に参詣したところ、「社悉く及大破仮御堂なり」。 |
| | 28 | - | 三嶋宿を出立し、原宿まで徒歩。原宿では中林湘雲（「湘雲師」）が懇意だという植松次郎右衛門と申す者があり、同人方に立ち寄る。原宿から吉原宿まで駕籠に乗る。夜、吉原宿扇屋伊兵衛方に宿泊。この時、中林湘雲（「湘雲師」）は一人原宿に内用があるとのことで、原宿に滞留。 |
| | 29 | 雨天 | 吉原宿扇屋を出立し、徒歩にて由井宿吉田屋吉右衛門方に到着致し、同人方にて宿泊。 |
| 2 | 1 | - | 由井宿吉田屋を出立し、興津宿より江尻宿に至る。中林湘雲と別れ、龍華寺（「此寺稀成素鉄、さほてん有」）および久能山（「久野山」）に参詣する。夜は中林湘雲と合流し、府中宿上藤屋喜右衛門方に宿泊。 |
| | 2 | - | 府中宿を出立し、通りがかりに浅間宮へ参詣。その後、安部川を渡り（「安部川かち渡」）、藤枝宿湊屋喜助方にて中喰。瀬戸川（「瀬の川」）を越えて、夜は島田宿新屋六右衛門方に宿泊。 |
| | 3 | - | 朝、大井川を渡り、日坂宿にて中喰。日坂宿にて秋葉街道廻りの「通し駕籠」を雇う。夜は森町大黒屋源兵衛方に宿泊。掛川で中林湘雲（「湘雲師」）と別れる。 |
| | 4 | - | 大黒屋を出立し、坂下高木安兵衛方にて中喰をして、秋葉山（「御山」）に登る。本社への参詣を済まし、夜は石打村山形屋八右衛門方に宿泊。 |
| | 5 | 晴天 | 石打村山形屋を出立し、大野村若松屋忠七方にて中喰。50町程登り、鳳来寺へ参詣（「此御山行者越劍之峯坏と申厳石有り」）。夜は新城の柏屋惣右衛門方へ宿泊（此宿菅沼新八郎殿御領分二而随分繋花也）。 |
| | 6 | 晴天 | 新城を出立して、豊丘稲荷（「此豊川稲荷二稀成太鼓有り」）、「明神」へ参詣し、東海道御油宿に出る。御油宿にて中喰をし、夜は岡崎宿木村屋に宿泊。 |
| | 7 | 晴天 | 岡崎宿を出立して、池鯉鮒宿にて中喰。「池鯉鮒明神」や「熱田明神」を参詣し、夜は名古屋笹屋正兵衛方にて宿泊。 |
| | 8 | 晴天 | 名古屋を出立して、継立駕籠に乗って「津嶋牛頭天王」へ参詣。船にて桑名城下へ着船。夜は桑名の吉田屋甚右衛門方に宿泊。 |
| | 9 | 晴天 | 桑名宿より駕籠にて四日市まで行き、神戸宿にて中喰。それより「白子観音」へ参詣し、上野宿を通り抜けて、津の野口屋にて宿泊。 |
| | 10 | 晴天 | 津の宿を出立し、松坂にて中喰。御師幸田氏方に着（同所に宿泊カ）。 |
| | 11 | 晴天 | 二見浦に参詣。夜は国元へ書状を出す（御師方に宿泊カ）。 |
| | 12 | 晴天 | 伊勢神宮（外宮・内宮）を参詣し、帰路にうなぎ屋（「うなぎや」）にて中喰。御師方に宿泊。 |
| | 13 | 曇天 | 五ツ半時頃より浅間参詣。御師方宿泊。 |
| | 14 | 晴天 | 御師方に逗留し、「種々珍味」を終日馳走になる。 |
| | 15 | 晴天 | 朝五ツ時頃、御師方を出立し。紀州藩領新茶屋秋田屋浅右衛門方まで「手代宗兵衛・由松」（御師の手代カ）に送られる。夜は月本の角屋清兵衛方に宿泊。 |
| | 16 | 晴天 | 月本を出立し、三軒茶屋角屋六次郎方にて中喰。それより駕籠に乗って移動し、夜は平松宿伊勢屋半兵衛方に宿泊。 |
| 17 | 晴天 | 平松宿を出立し、駕籠に乗って伊賀上野に至る。同所布屋多右衛門方にて中喰。夜は笠置の大和屋伊三郎方に宿泊。 | |
| 18 | 晴天 | 大和屋を出立、和泉川を越えて笠置山に参詣する。猿沢の小刀屋吉助方へ宿泊。 | |
| 19 | 雨天 | 案内者を雇って、猿沢池の辺りから春日宮など数多の宮々に参詣。「大鐘大仏殿」、「法花寺」、「西大寺」、「唐招提寺」（「招提寺」）、「菅原天神社」、「西ノ京薬師寺」、「法隆寺」にも参詣。夜は法隆寺門前の大黒屋鶴松方へ宿泊。 | |
| 20 | 雨天 | 大黒屋を出立して、「龍田明神」へ参詣。その後、「船屋村」、「しもた村」、「當麻寺」、「高田村」、「八木村」を経て、夜は三輪竹田屋へ宿泊。法隆寺から當麻寺までは駕籠にて移動。 | |
| 21 | 晴天 | 竹田屋を出立し、「三輪明神」拜殿を参詣。裏へ廻って「奥之院」を拝する。道中、「長谷寺観音」へ参詣する。桜井宿に出て、駕籠乗り30丁程行く。道中「岡寺」（西国第七番之札所の観世音也）に参詣。その後、「多武の峰山内」へ出る（此辺桜の古木両側ニ数多あり、十三之塔有り、其外諸堂多し天台宗也、寺中数多有り、本坊竹林坊大僧正也。御朱印三千五百石と云、天下普請也）。この日は、四軒茶屋松屋佐兵衛方へ宿泊。 | |

| | | |
|----|--------|--|
| 22 | 晴天 | 松屋を出立し、「瀧の畑村」を経て、吉野山（「吉の」）へ登る。「蔵王大権現」等を参詣、見物し、夜は土田村（「つち田村」）竹屋に宿泊。 |
| 23 | 晴天 | 土田村を出立し、高室院へ至る（「登詰候処ニ女人堂有り、是ガ内女禁制」）。高室院へ宿泊カ。 |
| 24 | 曇天 | 高室院出入の数珠屋の子どもを案内として、山内（「御山内」）を参詣する（「宿坊ガ五六町行、一の橋打越候得者、両側ニ諸侯様之御墓数多有之、右之方ニ多田満仲公之墓有り、亦明智光秀之墓、是ハニタツニ割れて有り、はせしを石碑有り、「姿見の井戸」、程行無名の橋、是ハ奥の院の際なり、長者の万燈ひんの一燈、右の方江重ねん堂有り」）。夜は、大津江戸屋吉兵衛方に宿泊。 |
| 25 | 晴天 | 大津江戸屋を出立し、和歌山まで川船を利用する予定であったが、高値のために歩行。道中「粉川寺」に参詣する（「西国三番之礼所粉川寺参詣ス、此寺大門ニ二王門等有之、随分景能地なり」）。岩出（「岩で村」）から船に乗って和歌山に着く。城下を見物して、夜は山口村飴屋孫七方に宿泊。 |
| 26 | 曇天のち大雨 | 駕篑にて銭屋を出立し、貝塚宿（「此所随分繁花之地なり」）を経て、岸和田城下（「是之高五万三千石岡部筑前守殿居城なり」）、堺に出る。夜は河内屋友七方にて宿泊。 |
| 27 | 晴天 | 河内屋を出立し、子どもの案内にて七町程行き、住吉頓宮（「住吉宿院」）へ参詣（「是者住吉御旅所也」）。その後、妙国寺（「住吉御旅所ガ妙国寺迄者何れも裏通ニ而往来筋ニ非ず、夫ガ往来江出る、鉄炮丁、皆以鉄炮鍛冶其外、炮（包）丁鍛冶品々多し」）、「住吉の社」、天下茶屋（「是ハ秀吉公御休の由、則天下茶屋と云、右村江入込迄町程行、左の側ニ天下茶屋有り、庭中ニ朝鮮ガ舶来の木有り、宝物入別荘有り、見物終りてじよさいを施し、右葉見物人願ニ依て差出ス」）、天王寺、日本橋を経て長堀橋南詰の平野屋佐吉方へ到着し、同所にて宿泊。 |
| 28 | 晴天 | 案内を雇い、大坂市中を見物（「御城伝馬入天神、東西御坊、淀屋橋、四ツ橋、高麗橋筋、長者町、難波新町、きず川通其外名所数多、見物いたす」）。その後、「淀屋橋上中之嶋川越様御用場」（川越藩蔵屋敷カ）にて川越藩士星隼太宅へ参り面談する。それより一度旅宿平野屋へ帰り、夕刻に讃岐国の金毘羅宮へ行く船（「金毘羅船」）に乗り、船中に泊まる。 |
| 29 | - | （28日夜より川口を出帆し、天保山際を通り沖合にて夜が明ける。南風にて走り兵庫湊へ入津。風の具合が悪くなり、兵庫湊にて潮懸り。夕七ツ時頃より風が変わり、同所を出帆。一ノ谷、須磨等を横に見ながら、明石沖にて日暮となる。） |
| 30 | - | 沖合にて夜が明け、小豆島を左に見ながら船が走る。夜九ツ時頃、「瀬戸」へ潮懸りし、明け七ツ時頃に出帆。 |
| 1 | 晴天 | 四国瀬戸内海にて夜明けを迎え、朝四ツ時頃に丸亀川口へ到着。上陸して、一町程行き船宿備前屋藤蔵へ到着。それより多度津、普通寺を経て「象頭山金毘羅御山下町中」に出る。それより内町虎屋惣右衛門方に到着。すぐさま金毘羅宮（「象頭山」）に参詣し、虎屋に宿泊。 |
| 2 | 朝、雨天 | 再び金毘羅宮（「象頭山」）へ参詣する（「右之側門玄関構之所有り、此所ニ而御札頂戴登る也、本開帳拾弍匁、半開帳六匁何れも御札附並小札百廿四銅、半開帳御札頂戴御堂ニ至り、左側ニ役場有り、是ニ而半開帳願宣候趣申述候得者、暫く御経有りて金の御幣ニ而頭上を御はらひニなる、参詣終て下向いたし御札入箱差出候所有り、半開帳御札箱弍百九拾銅、小札箱百五拾銅、亦九拾銅両様有り、右家ニ而箱ニ入油紙ニ而包呉申候」）。のち、丸亀に至り、備前屋にて宿泊。 |
| 3 | 曇天 | 備前屋から船に乗船するが、風の具合が悪く船中に滞りし、そのまま船中に宿泊。 |
| 4 | 晴天 | 西風にて丸亀船掛かり場を出帆。備前国田の口浦へ入津。それより即刻上陸をして、瑜伽山に参詣する。のち、瑜伽山を下って元の往来を通り田の口浦に出る。田の口浦で乗船。船中に宿泊。 |
| 5 | 晴天 | 北風にて風の具合が悪く船が進まないで、漸く翌六日朝に赤穂浜に到着。夜は船中に宿泊。 |
| 6 | 雨天のち晴れ | 赤穂から三里半を行き、「片ノ嶋」で中喰。それより書写山の堂へ参詣し、姫路に至る（「姫路入口迄五拾町御城御天守稀成高キ御天守也」）。夜は姫路の北條屋にて宿泊。 |
| 7 | 晴天 | 姫路より豆崎村を経て、明石に至る（道中の記述：「是ガ（※豆崎村）右江入込拾八町行曾祢天神、右社内ニ曾祢之松古木枯て、今ハ若木也、夫ガ拾八町行石の宝殿、是ハ石の堂の形様横ニ有り、同所ガ高砂迄壹里、同所ニ者高砂の社相生之松有、社内ニ有り、亦三拾町程行住吉明神、右社内尾上の鐘、亦尾上の松有り、右松矢張相生松ト云、天正頃枯れ今ハ三代也ト云、同所ガ拾五町程行浜の宮天満宮の古賀の松有り、亦拾五町程行手植の松有り、是ハ手植いたし候如クニ付、則名付しと云」）。夜は明石の駕籠屋に宿泊。 |
| 8 | 晴天 | 明石を出立し、兵庫を経て西ノ宮に至る。道中には須磨寺、生田明神などに参詣し、源平合戦ゆかりの史跡や楠木正成の「石碑」を見る。夜は西ノ宮角屋利兵衛方に宿泊。 |
| 9 | 晴天 | 角屋の側にある「糸ひすの社」に参詣し、すぐさま尼ヶ崎に出る。のち、急ぎ大坂に出る。平野屋佐吉方に宿泊。 |
| 10 | 晴天 | 大坂を出立し、森口宿にて中喰。淀川沿いを徒歩にて移動し、橋本宿角屋三郎兵衛方に宿泊。 |

| | | | |
|---|----|---------|--|
| 3 | 11 | 大雨天 | 角屋を出立し、石清水八幡宮に参詣（「角屋出立、四町行程、右江入込、石清水八幡宮参詣道筋有り、夫が拾四町小登り、御社黄金也」）。それよりあぜ道を行き、宇治の手前にある「新田」にて中喰。平等院の七堂伽藍や源頼政の墓などを見学した後、西国十番観世音の三室戸寺、黄檗宗本寺の黄檗山萬福寺（「此宇治の里何れも茶の木多し、夫より半道行程、黄檗山、此寺境内広し、黄檗宗本寺也」）、「三拾三軒堂大仏」へ参詣し、五条橋を経て六角堂前茂智屋惣左衛門方へ到着（宿泊）。 |
| | 12 | 雨天 | - |
| | 13 | 曇天 | - |
| | 14 | 晴天 | - |
| | 15 | 晴天 | - |
| | 16 | 晴天 | 六角堂、錦天神、祇園社、知恩院等へ参詣。 |
| | 17 | 晴天 | 御所、吉田殿、真如堂、金戒光明寺（「黒谷」）、南禅寺（「南善寺」）、金地院（「金智院」）、「東大谷」、清水寺、大仏、三十三間堂、東福寺、東本願寺等へ参詣。 |
| | 18 | 晴天 | 西本願寺、北野天満宮、金閣寺、今宮神社、大徳寺、西陣、二条城などへ参詣、見学。 |
| | 19 | - | 京都茂智屋惣左衛門方を出立し、三条橋を通り、三井寺を参詣し、大津宿往來に出る。「小船」より船を雇い「唐崎の一ツ松」を見物して、石山寺下まで乗船し、石山寺に参詣。また、船に乗り「矢橋」にて上陸。それより草津宿に出る。夜は草津宿并筒屋五兵衛方へ宿泊（「至而恙し」）。 |
| | 20 | 晴天 | 草津宿を出立し、武佐宿、高宮宿を経て鳥居本宿に出る。鳥居本宿からは「彦根の御城」が見える。鳥居本宿大藤屋孫太夫方に宿泊。 |
| | 21 | 晴天 | 鳥居本宿大藤屋を出立し、番場宿、醒井宿、柏原宿、今須宿、関ヶ原宿、垂井宿、赤坂宿を経て美江寺宿に至り、同所松屋に宿泊（「鳥居本大藤屋出立、三町程少しの峠有り、登終四五町、夫がばんばさめが井、柏原宿、今須宿、此処伊吹山之麓也、往來左江拾五町程離れ見ゆる、きり不絶出居る、亦右宿内伊吹山もくさ商人両側二数多有り、夫が（四五町行、長久寺村有り、此処美濃ト近江の国界也、則寝物路ハ是也）志里行、関ヶ原宿古戦場也、此宿斯方五六町入込、陣場有リト云、亦右ノ方江四里程入込候得者、養老之瀧有り、中喰同宿江戸屋五郎右衛門、此宿ニ養老瀧之銘、呉ノ口赤城の石摺閣ヶ原御陣多し、絵図有り、何れも武百文も、夫がたる井此所大垣・清州道名古屋出る也、赤坂宿（此間ろく川有り船渡し）打越みえし宿（※美江寺宿）松屋泊り」）。 |
| | 22 | 晴天 | 美江寺宿を出立し河渡宿、新金村、鶴沼宿、太田宿を経て、伏見宿に至る。伏見宿大坂屋文吉方に宿泊（「みえし宿出立、大津き川有り、夫が河渡宿、此所河渡川有り、舟渡しかのふ宿御高三万石永井肥前守殿御城下、夫が志里半行程、新金村ト云処有り、梅村屋利兵衛云中喰、茶屋有り、至るよし旅人泊り宿ハ不致、中喰而已、尤右茶屋巻軒ニ而外ニなし、武里半余行、うぬ間（※鶴沼）宿江出る、同宿が少しの坂を登り、里数志里程行大田川の洲江出る、右川洲を志里程登り、大田宿（※太田宿）江出る、夫が大田川舟渡打越武拾町行程、熊坂長坂、相生松有り、亦志里行ふしミ（※伏見）宿大坂屋文吉泊り、此宿名古屋が小牧通江出れハ是江出る也」）。 |
| | 23 | 晴天 | 伏見宿を出立し、御嶽宿、細久手宿を経て、大井宿脇本陣高木善右衛門方に宿泊。 |
| | 24 | 晴天 | 大井宿高井善右衛門方を出立し、中津川宿にて薦屋平吉方に引き留められ、同家にて馳走になる。夜は薦屋平吉方に宿泊（「此薦野屋者同家四軒有り有り（ママ）、本家薦野屋由兵衛、薦野平吉、薦野屋兵七、薦野屋為七、都合四軒有り」）。 |
| | 25 | 晴天 | 「終日知（※馳）走ニ相成」。薦屋に宿泊。 |
| | 26 | 晴天、夜は大雨 | 薦屋を出立。三十町程、薦屋信次郎、同彦助の二人の見送りを受ける。それより、馬籠宿から妻籠宿までは馬に乗って、嶋崎方に到着。妻籠宿嶋崎家にて宿泊。 |
| | 27 | 大雨 | 妻籠宿嶋崎家にて馳走になり、同家にて宿泊。 |
| | 28 | 晴天 | （妻籠宿）嶋崎家先祖の墓所に参る。夜は（妻籠宿）嶋崎家へ紀州藩家老が宿泊するため、親類の大野屋孫右衛門方に宿泊。 |
| | 29 | 曇天 | 大野屋にて朝飯を食べ、嶋崎家へ帰る。それより種々馳走になり、夜は同家に宿泊する。 |
| | 1 | 1 | - |
| 2 | | 曇天小雨 | （野尻宿を出立して）須原宿、上ヶ松宿、福島宿（「福原宿」）を経て、宮ノ越宿に至り、「となり屋」仁右衛門方に宿泊。 |
| 3 | | 晴天 | 宮ノ越宿を出立し、藪原宿、奈良井宿、贛川宿、本山宿、洗馬宿を経て、善光寺街道の郷原宿に至る。郷原宿山城屋太郎右衛門方に宿泊。 |
| 4 | | 晴天 | 郷原宿を出立して、「村井」、松本宿（「随分繁花之地也」）、岡田宿、刈谷原宿（「かり原宿」）、「会原宿」（会田宿か）、「乱れ橋村」を経て、青柳宿に到る。夜は紅粉屋豊次方に宿泊。 |

| | | | |
|---|----|-------|---|
| 4 | 5 | 曇天 | 青柳宿紅粉屋を出立し、麻績宿、猿ヶ番場峠、篠ノ井宿（ひし屋丈次郎にて中喰）を経て善光寺に至る。「御堂」へ参詣をし、そのほか所々を見物して、夜は善光寺門前の藤屋平左衛門方に宿泊。 |
| | 6 | | 善光寺の御開帳に参り、それより藤屋を出立。篠ノ井宿ひし屋まで戻り中喰をし、屋代（「矢代」）へ出る。その後、戸倉、坂城（「坂木」）を経て、上田宿（「此所松平伊賀守殿城下也」）に至る。夜は、上田柳町藤屋平左衛門方に宿泊。なお、戸倉、坂城辺りの宿は客引が多く出る（「戸倉、亦坂木（※坂城）此辺宿引多く出る、種々申掛引留候二付旅人、女人ハ心慎事」）。 |
| | 7 | 曇天 | 上田を出立し、真田、小日向、田城を経て大笹に至る。夜は、大笹の中屋八郎左衛門方に宿泊（「上田より真田迄三里、真田が大日向迄壱里、大日向が田城迄三里、此間二壱里半之峠有り、此辺り誠ニ寒気強く、殊ニ人家少し、都而上田が草津迄拾三里之間、弁当ハ持参すべし、田城が大笹迄貳里、此大笹入口ニ関所有り」）。 |
| | 8 | 大雨のち晴 | 大雨のため出立を見合わせていたが、晴れたので四ツ時頃に中屋を出立。中井村、芝原を経て草津に至る。草津の山本金右衛門方に宿泊し、入湯。 |
| | 9 | 雨天 | 草津にて終日入湯。 |
| | 10 | 晴天 | 草津にて入湯。昼から「金毘羅之瀧」へ赴き、賽の河原（「さいのかはら」）を見物。桐屋にて酒宴。 |
| | 11 | 晴天 | 「不動之瀧」、「薬師の瀧」、「天狗の瀧」など都合12本の瀧を見物。そのほか「温泉場所」見物。 |
| | 12 | 晴天 | 草津にて終日入湯。 |
| | 13 | 晴天 | 草津を出立して、小雨村、生須村、澤渡を経て、中之条（「中野条」）へ至る。中之条二見屋平八方に宿泊（「随分宜敷地也」）。 |
| | 14 | 晴天 | 中之条二見屋を出立し、小野子、北牧、白井、八崎、米野、小暮を経て大胡に至る。夜は大胡の蛭子屋条治方に宿泊。 |
| | 15 | 曇天 | 蛭子屋を出立し、室沢、深沢、埴、神戸を経て、澤入に至る。夜は澤入の松嶋治衛門方に宿泊。 |
| | 16 | 雨天 | 澤入松嶋屋を出立し、足尾、中禅寺湖を経て日光に至る。道中には「男体権現」への参詣、「華厳の瀧」の見物（「誠以珍敷瀧ニ而潮水の流落なり」）を行っている。 [以後、本文後欠] |

出典：「伊勢参宮道中記」（当館所蔵）